

## 傍観者によるネットいじめの被害者、加害者非難

—公正世界信念の下位概念の影響に注目して—

野中りょう<sup>1</sup>・森永康子<sup>2</sup>

(1 広島大学教育学部・2 広島大学大学院教育学研究科)

## 問題

本研究は、いじめの被害者非難に公正世界信念(BJW; Lerner, 1980)がどのように関わっているのかを検討する。BJWは、世界は公正、安全で、その人にふさわしいものを手にすることができる場所であるという信念であり、人々は信念維持に動機づけられていると考える。BJWは、これまで犯罪被害者に対する非難の代表的な説明原理として検討されてきたが、BJWの下位概念によって信念維持方略が異なることが示されている(村山・三浦, 2015)。BJWのうち、内在的公正世界信念(BIJ; ある出来事が生じた原因は過去の行いによるものとする信念)は被害者非難や加害者の非人間化を通しての加害者非難を行うが、究極的公正世界信念(BUJ; 不公正による損失は将来埋め合わされるとする信念)は被害者と心的距離をとるとされる。これらの先行研究の結果は犯罪場面におけるものであるため、本研究では同じ結果がいじめ場面でも示されるかを検討する。また近年、ネットいじめが増加し問題視されていることから本研究ではネットいじめを扱う。

## 方法

**参加者** 大学生 54 名(男性 22 名, 女性 32 名)

**手続き** 1 週目に BIJ, BUJ, 不公正世界信念の 3 因子各 4 項目からなる多元的公正世界信念(村山・三浦, 2015,  $\alpha > .85$ )への回答を求めた。2 週目に、参加者と登場人物の性別を一致させたいじめシナリオを読ませ、その後、被害者非難(5 項目,  $\alpha = .80$ ), 加害者非難(3 項目,  $\alpha = .70$ ), 心的距離(2 項目,  $\alpha = .72$ ), 加害者の非人間化(4 項目,  $\alpha = .69$ )に 6 件法で回答してもらい、最後にシナリオをいじめと判断したかどうか(わからない, いじめではない, いじめである), 性別や年齢などを尋ねた。

## 結果と考察

いじめ認識(いじめと判断した場合とそれ以外で分類)の有無で *t* 検定を行ったところ、被害者非難, 加害者非難, 加害者の非人間化で有意な差がみられた(表 1)。そこでいじめ認識の有無ごとに、SEM による分析を行った結果、いじめと認識した場合(Figure 1), BUJ が高いと心的距離を遠くする

表1 各変数の平均値といじめ認識の有無による差 ( )はSD

	いじめ認識あり(n=38)	いじめ認識なし(n=16)	p 値
被害者非難	2.41(0.87)	3.23(0.86)	$p = .004$
加害者非難	5.11(0.59)	4.63(0.52)	$p = .005$
心理的距離	3.79(1.19)	4.09(1.29)	$p = .425$
加害者の非人間化	4.75(0.67)	4.27(0.99)	$p = .088$

傾向にあり、BIJ が高いと加害者非難をする傾向にあった。先行研究と同様の結果がみられたが、BIJ から加害者の非人間化、被害者非難への影響はみられなかった。いじめと認識しなかった場合(Figure 2)は、BIJ と BUJ の影響はみられなかった。被害者非難が生じなかった原因として、いじめ認識の影響が考えられる。Koehler & Weber(2018)によると、出来事を深刻と捉えた場合は被害者非難をしない傾向にあることが言われており、いじめと認識した参加者は出来事を深刻と判断し、BIJ が高くても被害者非難をしなかったのではないかと考えられる。加害者の非人間化への BIJ の効果がみられなかったが、これは、シナリオ中に加害者の記述が多く、BIJ の高低に関係なく加害者の非人間化が起きやすかったためではないかと考えられる。今後はいじめをどれほど深刻だと判断したかによって公正世界信念の信念維持方略が異なるかを検討する必要があるだろう。

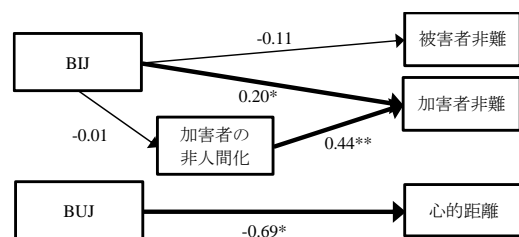


Figure 1 いじめ認識ありのSEMの分析結果(CFI=.959, RMSEA=.066)

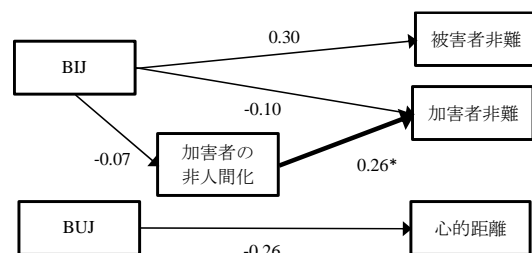


Figure 2 いじめ認識なしのSEMの分析結果(CFI=.626, RMSEA=.257)

注1) 心的距離は数値が低いほど距離を遠くする。